

「日本の姿」

～既習知識をふまえて、知的好奇心を高める工夫を～

京都府社会科教育実践研究会員

教材観

学習指導要領における地理的分野の内容には2つの大項目があり、それにもとづき帝国書院の『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）は第1部「世界のさまざまな地域」、第2部「日本のさまざまな地域」で構成されている。ここで取り扱う「日本の姿」は第2部の最初の中項目で、第1部の学習の成果をふまえ、さらに日本および日本の諸地域の地域的特色をとらえる学習を通して国土認識を深めていく学習の導入的単元である。その内容は、学習指導要領では以下のように示されている。

ア 日本の地域構成

地球儀や地図を活用し、我が国の国土の位置、世界各地との時差、領域の特色と変化、地域区分などを取り上げ、日本の地域構成を大観させる。

この単元の指導計画を作成する場合の配慮事項として次の二点を重視したい。

(1) 小学校学習指導要領の第3章第2節「第5学年の目標と内容」2内容(1)のアとの関連をふまえた指導の工夫

ア 世界の主な大陸と海洋、主な国の名称と位置、我が国の位置と領土

「小学校学習指導要領解説 社会編」では地図帳や地球儀の活用、白地図への表現、北方領土問題の扱いなどについて詳しく指導の例も示されている。また、「我が国の位置」

の言い表し方の例として、「ユーラシア大陸の東方に位置している」「大韓民国、中華人民共和国、ロシア連邦ととなり合っている」など世界の広がりの中かでとらえ、表現できるようにすることが求められている。小学校段階での学習の成果が定着しているとは限らないが、中学校の2年生での学習目標を設定する場合に小学校の学習内容との系統性を明らかにし、どのように発展させるかが重要になってくる。

(2) 「時差」の学習をこの単元に移行した趣旨をふまえた指導の工夫

従来第1部「世界の姿」に含まれていた「時差」を、第2部で学習させることになった趣旨をふまえ、指導方法の改善が求められている。これまでの学習時期では発達段階的に抽象思考が困難な生徒も多く、時差の計算が定着しない状況も多く見られた。今回の移行によって数学の正の数、負の数の概念なども活用することによって、新たな指導の手立ても考えられるはずである。また、「時差」以外についても1年生での地理的分野、歴史的分野での学習成果をふまえて指導計画を作成したい。

2 単元の指導計画と評価

地理全体120時間の配分はそれぞれの工夫に任せられるが、1年で「世界のさまざまな地域」を55時間程度、2年で「日本のさまざまな地域」を65時間で計画するとして、この

「日本の姿」は5～7時間扱いが妥当だと考えられる。また、『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』（中学校社会）平成23年7月国立教育政策研究所教育課程研究センター」では、この単元の評価規準に盛り込むべき事項を観点ごとに次のように示している。

- (1) 【社会的事象への関心・意欲・態度】
日本の地域構成に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、とらえようとしている。
- (2) 【社会的な思考・判断・表現】
日本の地域構成を、国土の位置、世界各地との時差、領域の特色と変化、地域区分など

を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。

- (3) 【資料活用の技能】
地球儀や地図など日本の地域構成に関する様々な資料から、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。
- (4) 【社会的な事象についての知識・理解】
日本の地域構成について、国土の位置、世界各地との時差、領域の特色と変化、地域区分などを理解し、その知識を身に付けている。
これをふまえ、次のような単元指導計画案（6時間扱い）を作成した。

時数 ／6	教科書	項目	学習内容	指導上の工夫・留意点	活用できる地図帳 [※] の ページ
2時間	p.120～121	世界の中での日本の位置	・緯度と経度を使って国土の絶対的位置をとらえる。 ・さまざまな相対的位置（関係的位置）をとらえる。	・1年生の地理的分野、歴史的分野の既習知識を活用しながら、わが国の位置の特色をとらえさせる。	p.19～20、p.29～30、p.51～52、p.53～54、p.65、p.141
2時間	p.122～123	時差でとらえる日本の位置	・生活に関わる資料などを通して、「時差」から地球上におけるわが国と世界各地の位置関係を理解させる。 ・簡単な時差計算ができるようにする。	・オリンピックなどの試合開始時間や、テレビによる生放送の時間などから、わが国と世界各地の位置関係を考えさせる。	p.1～3
1時間	p.124～125	日本の範囲	・わが国の海洋国家としての特色や、当面する領土問題や経済水域の問題について理解する。	・北方領土について、位置や範囲を確認させながら、わが国固有の領土であるが、ロシアに占拠されていることなどについて理解を深めたり、領土問題に対する考え方を交流させたりする。	p.125～126、p.163
1時間	p.126～129	都道府県と地域区分 さまざまな地域区分と略地図	・さまざまな地域区分の仕方ではわが国の国土をとらえる。 ・都道府県名や都道府県庁所在地名を地域区分と併せて大まかな位置を覚える。	・「地域の区分の仕方」にはさまざまな区分の仕方があることを知るとともに、わが国の国土の地域構成を大まかにとらえられるようにする。	p.164

3 実践のポイント

(1) 世界の中での日本の位置 (p.120～121)

前述したように、ここでは小学校での学習の成果や、1年生で学習した「世界のおもな国」（教科書p.4）や「緯度と経度」（教科書p.10）で学習した内容を十分にふまえ、「2年生の内容」としてふさわしい課題を設定することが重要である。

したがって、緯度と経度を使って国土の絶対的位置をとらえさせたり、ユーラシア大陸や隣国との関係で位置をとらえさせたりした後、次のような課題を与えることが考えられる。

- ①教科書p.121の地図に、歴史で学習した遣唐使船や南蛮貿易船などが、大陸からわが国へ到達した経路を予想して書き入れてみよう。
→解答は地図帳[※]p.29～30を参照させる。
- ②地球儀や地図帳でシカゴ、ロンドン、シド

※平成24年度用「中学校社会科地図」（以下、地図帳）

ニーを探し、それぞれの都市が東京とどれくらいの距離か、またどれくらいの時間で結ばれているかを予想させる。

→解答は地図帳p.19～20を参照したり、地図帳p.141の東京を中心とした正距方位図やロンドン、ブラジリア、キャンベラを中心とした正距方位図で距離や方位を調べたりして、日本の位置を多面的に把握するようにする。

③地図帳のp.51～52で、「シベリア鉄道と各地への到着時刻の例」の表記を白地図に写し取るなどして、ユーラシア大陸の東の端という表現を具体的にイメージさせる。

(2) 時差でとらえる日本の位置 (p.122～123)

これまではプラス・マイナスの概念などが使いにくかったが、2年生のこの時期に移行したことで、地図帳p.1～3の「③等時帯」の地図なども活用し、基本的な時差の計算の考え方は習得しやすくなると考える。しかし、時差計算に関わる理解、技能が不十分な状況が見られる場合は、例えば数年前にこの「社会科のしおり」で紹介されていた「時差測定器」(空き缶に世界地図を巻き、360度を24時間で区切った図の上で回転させるもの)など、具体物を用いて思考に慣れることが有効であると考える。

また、教科書p.123で基本的な計算の技能を身につけることができれば、具体的な生活と関連する資料を用いて、各国との時差からわが国と世界各地との位置関係を理解させることが重要である。例えば次のような新聞記事やインターネットニュースの記事を活用し、さまざまな学習課題を設定することができる。

2012年7月27日に開幕するロンドン五輪の組織委員会は、開始時間入りの詳細なスケジュールを発表した。それによれば、開会式は27日午後7時半(日本時間28日午前3時半)からである。

前回の北京五輪ではアメリカ合衆国向け放送を考慮して午前に始まった競泳決勝は、今回午後7時半の開始となる。北島康介が3大会連続2冠を狙う男子平泳ぎ決勝は100mが7月29日、200mは8月1日に行われる。

日本期待の柔道は7月28日に男子60kg級と女子48kg級でスタート。女子が8月5日、男子は最終日の12日に行われるマラソンはいずれも午前11時(日本時間 ? 時)にスタートする。

室伏広治が注目される陸上男子ハンマー投げ決勝と、ウサイン・ボルト(ジャマイカ)が2連覇を狙う男子100m決勝はいずれも8月5日夜に実施。サッカー決勝は男子が8月11日、女子が9日にウェンブリー競技場で行われる。

①日本と、オリンピックが開かれるロンドンでは何時間の時差があるだろう。

(注意:日本とロンドンの標準時差は9時間であるが、オリンピック開催時はロンドンは夏時間制を採用しているため、8時間の時差となっている。)

②【発展】「北京五輪ではアメリカ合衆国向け放送を考慮して午前

に始まった競泳決勝は、」というのはどういうことだろう。

(3) 日本の範囲 (p.124～125)

ここでは、「領域の特色と変化」から日本の地域構成を大観させることがねらいである。まず、教科書p.125の「⑩領土・領海・領空の模式図」を用いて、「領域」は領土だけではないことを理解させる必要がある。そのうえで地図帳p.163を見て日本の領域全体を大観させる。その際、東の端と西の端で30度以上の経度の差があり、同じ日本でも日の出、日の入りに時差があることなどに気づかせたい。また緯度の差も大きく、北の端と南の端では気候帯が違うことも理解させる。

また同じ地図から、日本が海洋国家であり、国土面積よりもはるかに広い排他的経済水域をもっていることなどに気づかせるようにしたい。

そして、そのような状況のなかで北方領土問題や竹島の問題にふれ、地図帳のp.125～126「③日本とロシア・ソ連の国境の変遷」などを活用しながら、わが国の主張などを的確に扱うようにする。その際、占領されたときに島を追い出された元島民の方の高齢化とともに、領土問題が風化してしまわないように、国民全体の問題として関心を高めたい。そのためには、北方領土がどんな場所であるのか、現在どのような人たちが住んでいるのか、その人たちがどんな生活をしているのか、そのような情報を収集させ、まとめたことを交流したり、領土問題についての意見を交換させたりする学習活動を取り入れることも重要である。

(4) 都道府県と地域区分、さまざまな地域区分と略地図 (p.126～129)

さまざまな地域区分や都道府県名を学習させる際、羅列的・網羅的にただ暗記させる学習に陥らないように工夫することが大切である。そのことを意識した手法として次に紹介する実践例は効果的であった。

【準備物】日本の地域区分の仕方を取り上げ、カードを作成する。

例：①東日本、西日本 ②西南日本、中央日本、東北日本 ③九州、中国・四国、近畿、中部、関東、東北、北海道 など) 同じように都道府県名のカードと県名と異なる県庁所在地名のカードも作成し、すべてのカードの裏面にはマグネットシートを張りつけておく。

【学習活動】

①すべてのカードが混ざるようにして黒板の

右側に張りつける。

②「そのなかから3枚取り出して日本全体をつくり上げなさい」という課題を考えさせ、グループや個人で、カードを抜き出して黒板の左側に並べさせる(答えは1通りではない)。

例：3枚→西日本、中央日本、東日本

5枚→西日本、中部、関東、東北、北海道

12枚→九州、中国・四国、近畿、中部、関東、福島、山形、宮城、岩手、秋田、青森、北海道

このようなゲーム感覚の学習活動で、「東北は6つの県で構成される地域区分である」ことなどをとらえさせることができる。

また、抽出したカードを位置を考えながら黒板に張らせ、地域ごとに枠で囲んでいけば、自然と日本の略地図になるように工夫することもできる。

県庁所在地については、県名と違う都市名のみカードを作成し、どの地域にある都市かを当てはめさせることができれば、無理なく覚えることができるようになる。

4 終わりに

この単元は「2年生」の最初に扱われることが多いと思われる。1年生で世界のさまざまな地域を学習していることや、歴史的分野で学んだ他国との関係についての既習知識などを十分にふまえて、発達段階に応じた知的好奇心を高めるような課題設定をすることが、社会科教師に求められている単元であると考えられる。